
『異能現象』

黒猫優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『異能現象』

【Nコード】

N1922BA

【作者名】

黒猫優

【あらすじ】

未知なる『異能現象』。

そこで会う『深紅の翼の持ち主』

主人公『三崎良和』とそれを取り巻く。

現象と謎の話。

良和は女の子の夢を守るのか？

学園異能恋愛モノの小説。

― 零 ― (前書き)

登場人物の紹介です。

物語が進むごとに増える、登場人物のプロフィールはここに毎回、記録されます。

なるべく紹介文でネタバレはしないように気を付けます。

『三崎良和』 (男)

↓物語の主人公。黒い短い髪。若干の根暗な人。あまり、友達を作らないが、仲良い人とは、とても仲が良い。大抵の『友達』が女子と言うのも特徴。

人助けは余りしないが、正義感はあるため、人を助けることは多々ある。

自分のことを『偽善者』といってもいる。

親との関係はあまりよくない。

『遠松菜谷』 (女)

↓第一話のヒロイン。『深紅の翼』を持っている。栗色で若干長めの髪。小さな背が特徴。

恥ずかしがり屋で「あ、あうー」などと言葉が濁るときが多々ある。嫌いなものは嫌い。好きなものは好き。と、よく決める。

『読書部』に所属している。静かな空間で本を読むのが趣味。

『八島雅美』 (女)

↓主人公『良和』の幼馴染み。ロマンチックを目指して活動中。水色の短い髪。

恋愛モノの漫画を創作中らしい。良和には見せていない。

『バレエ部』に所属している。エースではないが、腕は確か。運動神経はよい方である。

一葉のことは嫌い。

『干野一葉』 (女)

↓昨年から、主人公『良和』の家の隣にすんでいる。茶色の長めの髪。責任感があり、ほんわかしている

のが特徴。一週間で14枚のラブレターをもらったという伝説もある。

運動神経はよいが雅美には負ける。勉学は学年で一番である。雅美のことは嫌い。

『園田晴樹』（男）

↓良和の良きアドバイザー。黒と茶色の間の色の髪。ほんわかしている性格上、友達が多く、信頼もあつい。

帰宅部である。勉学の方が運動神経より、よく学年で二番である。運動神経はさほどはない。晴樹のファンクラブがあるとか、ないとか。顔立ちは女っぽいことでも有名。

―始まりは憂鬱の始まり―

「プロローグ」

「ただいま」

時間は5…00ちょうどだった。自分の部屋に直行する。親はリビングにも、台所にもいなかった。

「疲れたぁー」

鞆を、机に投げる。ドスツ、音をたて、机に落下。

俺は自室のベッドに飛び込むように、倒れ落ちる。

「三日後は冬休みかぁー、はぁー」

休みには、多大な宿題がある。

そこだけは、嫌だった。面倒臭いからな

多分、冬休みの最終日に終わらせるだろう。

俺なら。ただ、それよりも嫌なことができた。

俺の名前は「三崎良和」（ミサキヨシカズ）高校二年生だ。好きな

ものはこれといってなく、

嫌いなものもこれといってない。普通で普通な一般高校生。身長は

クラスで真ん中。髪は黒い短髪。

何故、今、疲れているか？それは、四日前に遡る話だ。

「1. 画期的な世界の始まり」

あと、一週間後は冬休み。

塾と宿題のコラボレーションした地獄の始まりがあと、一週間後と
いうことだ。

はぁ、と机に上半身を倒して溜め息をついた俺だった。

「溜め息ついて、どうしたの？」

そんな俺に近づいてきたのは、友達の「園田晴樹」（ソノダハルキ）
だ。

男なのに顔立ちが女っぽく、髪は黒い短髪で俺と同じ。背は小さい。「いや、冬休みの始まりで俺は地獄に突き落とされるんだなあ」と

「何があったの、良和・・・」

なんか、可哀想な目を冷ややかにされたな、今。

「塾と宿題のコラボレーションは地獄だろう？」

「それは良和が宿題を溜め込むからでしょ」

そう言いながら、晴樹は俺の前の席の奴が不在のために、椅子に座り、両足は右に向け、上半身はこちらに向けて話してくる。

「そうは言っても、宿題はしたくない」

「それだから、終わらないんだよ、良和は」

嘆息気味に言う晴樹。今は一時間目の授業がおわり、二時間目に入るところだ。

キンコンカンコーン、と間の抜けたチャイムが鳴る。

「あ、二時間目が始まる。じゃね、良和」

「おうよ。晴樹」

と、晴樹は自分の席に戻る。

俺も寝る体勢から、通常の体勢に戻すべく、上半身を上げる

「ああ、社会か」

ハゲの社会担当の先生を見て、科目を把握する。最初から覚えとけ、と言う意見は聞かない。

引き出しから、教科書・ノートを出しつつ、

授業始まりの代名詞『起立・気を付け・礼』をする。

着席とともに、脱力感がでる。このハゲ教師授業前に、ニュースであった話を言うのは良いとして、自分の家の事情や学校のこと話すかな、友達みたいに。しゃべり方がウザイが。

「おお、そうや、お前ら知っとるか？昨日、また新しい異能現象が東区で起こったらしいぞ、知らなかったろ？」

知つとるわ。ニュースであつた。確か、第四の現象だつたつけ。

「それで東区の一部が吹き飛んだそうだぞ」

ゴメン。それは知らなかった。

「あれはたまにある、風の異能現象だな。規模なら最大級だが――

残りはもちろん、聞いてなかったぜ。

『異能現象』

通常の自然災害を超える現象。第一から第五の種類に分かれる。

第一は「異状」第二は「発生」第三は「憑依」第四は「自然」第五は「明晰」

五つの現象は違う反応を示す。例えば、第四

の現象なら自然災害を究極まで極めた現象が起こる。突風・落雷・津波・地震。様々だ。

「はあ、何を考えてんだか」

嘆息と同時に言葉を吐く。

「何を熱く考えてんだよ、俺は」

もう四時間目まで授業は終わり、昼休みだ。

弁当を机の横にかけてある鞆から取りだそうと、手を伸ばす。

「あれ？な、い？」

多分、この時間は購買部も混雑していて食い物など買える状態ではないだろう。

「今日の俺は飯なしだよ」

残念ながら、晴樹は生徒会の仕事でいない。

他クラスにまだ知り合いはいるが、多分笑って食い物をよこさない。

「はあー、しゃーねー」

仕方ない、と思い俺は食い物を諦めた。

ちよつと風に当たるか、と思い席を立つ。

ガタツ、と椅子は鈍い音を出した。

だだ、クラスの皆の声は生き生きしてた。

屋上にきた。風に当たるなら、一番の場所だ。幸い誰もいなかった。嘆息もでないまま、屋上のフェンスを背もたれにして寄りかかり、地べたに腰を下ろした。

風通しは良かった。風は俺に当たり、俺の髪を揺らす。

一切の無言だった。人はいないのだから、当たり前だが。

何となく、右を見る。右は中等部に属し、中学生がいる。だが、俺からは中等部の建物の屋上のフェンスしか見えない。中部部は高等部の真横にある。二つの建物を繋ぐように、通路が二つの建物の間にあるのだ。だが、使用されるのはあまりなく、文化祭などの物品を運ぶ時にしか使われない。

「はぁ」

嘆息する。この頃のニュースでは『異能現象』の話ばかりだ。聞いてる方は疲れるのだ。

―事件の瞬間、始まった?―

屋上にいると、皆の遊ぶ声が聞こえる。

何をしているかは分からないけど、楽しそうだ。

『異能現象』―――か。

ニュースを見ても分かるが、このところ現象の発生が異常に多いのだ。

魔術、超常現象、神の天罰、超能力、靈的現象。様々な言い方と様々な表し方をされる。

ただ、オカルトに変わりはなかった。

（確か、アメリカの『靈能事件』も異能現象って言われてたな）

あの事件は世界を深刻な状況にさせた。

事件内容もオカルトっぽかった。

人が精神的に壊れるのだ。『靈に憑依』されたように。狂い始め、それが感染していく。

一人、また一人と感染者が増えていった。

その感染がアジア近辺でも見られ、

人は『異能現象』の対策を本格的に始めた。

だがそれでも現象は止めきれない。

対策後の今でも、

中国での『人滅事件』、イギリスでの『神隠し』、オーストラリアでの『自滅事件』。

と、四つの事件がもう起きている。

（そして、この日本でも）

日本でも事件は起きている。それも今。

『異色事件』

通称はそう言われる。人間が『異色の何か』を放つようになるのだ。

それは、雰囲気というより、異能とも呼べた。

”人間が『異能』になる現象”

”異能を持つ”のではなく異能現象の一部になり、人工物や人間を殺すようになる。

現象になるとは、言い方が悪いがニュースではそう言われてる。

でも、それでは『異能を持つ人間は人間ではなく、異能現象と同じなんだ』と言ってるように聞こえる。存在を否定してるように。

この学校にも事件を受けた人はいる。

数人だが、それでもいた。

異能をもった者は直ちに、監獄に連れていかれ、拘束をされる。

その後、『更正』か『処分』のどちらかに、判決は決まる。

（何を暗いことをまたもや、考えてるだよ）

今日の俺は可笑しい。頭を冷やそう。

なにも考えずに風に当たろうと、座ったまま背伸びをする。

（あ、今、背中ビキビキっていったな。これは、筋肉痛の予感だ）

良くも予感の外れ、筋肉痛には、ならなかった。

ササアー、と風が吹いてくる。

少し寒かった。

だんだん風が強くなってきた。

（ちよつと寒いな。しかたねえ、教室に戻るか）

俺は教室に帰ろうと立ち上がろうとした。

ちよつとチャイムも鳴ったところだった。

だが、立ち上がろうとした瞬間、

―開門した『死』閉門した『生』―

予感がした。そうとしか、言い様がなかった。俺は地べたに座った状態からさらに体を伏せるために上半身を右に地べたに叩きつける勢いでふった。鈍い音がしながらも、上半身は地べたにベツタリとついた。

その瞬間、ビュンッ！！という音がした。

さっきまで俺の頭の位置にあったところに『何か』が襲ってきた。

『何か』はそのまま、俺の前方にある屋上のドアへと進んでいく。

そして、『何か』はドアまで斬った。『何か』はそのまま、前方に進んでいった。

俺はとっさに音のした方向である後ろを向いた。刹那、驚愕した。

「う、嘘だろ！」

『何か』は生き物ではなかった。

正体は、台風。それも『強大な鎌鼬の台風』だった。

風が吹き溢れる通常の台風とは違い、鎌鼬が台風のように吹き溢れ螺旋状になっていた。

その『台風』とはかなり距離が離れていた。

数に、何キロメートル。

それほどの距離があるのに、あの鎌鼬は鉄製のドアを切り刻んだのだ。

その瞬間、頭のなかに出た言葉があった

『異能現象』

「何で？、い、今、あ、あ」

謎が頭に浮かんた。異能現象は起きてるのに何で、『騒ぎが起きない』？

気づかないはおかしい。知らなかったはおかしい。最低でも、現象

を報せるために警報は鳴るはずだ。

だがとにかく、逃げないことには助かることはできない。

だが、ドアは破壊されている。

どうすれば？と、試行錯誤しているときに、

視界の端に何かを捉えた

ちょうど真横。右にいた。中等部の屋上。

人がいた。女の子だった。

栗色の短めの髪。少し背も低い。

可愛いらしい子だった。

「え。」

だが、女の子はただの女の子ではなかった。

『翼』が生えていた。真っ赤な悪魔的な翼が。女の子の背中に生えていた。

「何だよ、あれ」

小さく呟いた。すると、この言葉に反応したのか、女の子がこちらを向いた。

驚愕の顔をした。目も見開いている。

「何かを言ったようだった。必死に伝えてくるが言葉が聞き取れない。どうしたの！」

「き、聞こえないよ！」

必死に伝えてくる。だが聞こえない。

その時、ドムッ！という、大きな音がした。

音は台風から聞こえた。見てみると、

（ぼ、膨張してるッ！！）

というより、鎌鼬が螺旋状から乱れ、四方八方に飛び散ったのだ。

つまり、『こちらにも飛来してくる』

ヤバイッ！！、そう思った俺だったが。

百単位で来る鎌鼬は防ぎようも回避しようもなかった。

数百の鎌鼬が飛来してくる。

「あ、ああ、。あ」

完成された『死』が俺に向かってくる。

スローモーションで『死』の塊が見える。

(死、んだ、あ。あ)

次の瞬間、『死』の塊によって、俺の体は引き裂かれた。

目が覚めた。頭がボウとしている。

白い天井らしき物が見えた。

「こ、ここは？」

口から自然と声が出た。その時、

「気がついたか」

声が出た。はっ！と飛び起きる。

目の前には

「せ、先生・・・」

保健の先生の姿だった。

「何を驚いた表情で見ている」

「あ、いえ。――皆は？」

「授業中だ」

「授業中？」

大人な女性の先生『井熊冴子』（イクマサエコ）

怒れば鬼の先生だ。

「当たり前だ。お前は三時間目の授業中にぶっ倒れただろ？気を失って」

「え、三時間・・・目？」

俺はさっきまで、昼休みだったから、屋上に。わけが分からない

「まあ、取り敢えずは安静にしている」

「で、でも！――」

「している」

きつめに言われた。

「は、はい」

鬼に言われたら黙るしかないよね？

それでも、『アレ』を夢とは思えなかった。

「2. もう始まったよ、絶望は」

一時間、保健で寝たら気分が全快した。

なので、五時間目から俺はまた、授業に入ることにした。
自分の教室に到着する。ドアを開ける。

「お、遅れました」

声音に若干の緊張が入ってしまう。

相手は国語の先生『信楽立麻』（シガラタツマ）

男の先生だ。怖くはない。ただ、何故かこの先生には緊張が走る。

「ああ、良和君ですか、体は大丈夫なので？」

「はい。気分は全快です」

「そうですか。今は古典の勉強です。席について、教科書の50ページを開きなさい」

「はい、ありがとうございます」

イケメンな所も苦手だ。

そうも言いつつ、俺は席に着く。

（あれは夢だったのかなあー）

頭のなかで、考えが蹂躪する。

グルグルと回ってもきた。考えがまとまらない。

（本当に、夢？）

結局、授業は頭に入らなかった。

―考え中の苦悩、日常の平和―

そのまま、授業は進んでいった。
六時間目は数学だった。

「え、この式は――」

真面目に聞く気はなかった。
ってか、聞けなかった。

頭には、二つの言葉が巡っていた

（『夢』と『真紅の翼』――か）

例えば、夢だったとしても何故か気になる
数学の授業も頭にはいつてきなさそうだ。
俺はそのまま、授業放棄をしていた。

「4. ちょっとした日常のアレ」

そのまま、授業は終わった。

下校の準備と帰りの会がまだ残っている。

俺は机の横に掛けてある、鞆をとった。

そして、机の引き出しの中にある

教科書・ノート・筆箱・本を出そうとした。

が――

（――あれ？）

教科書がなかった。ノートもなかった。

筆箱もなかった。本もなかった。

あったのは、

（これは――羽？）

それは真紅の羽だった。あの時の、女の子にあった翼の羽の一部の
ような感覚がした。

だけど、血のついた羽にも見えた。

ともあれ、教科書やら、何やらは見つかった。

（まさか、靴箱の中とはな）

” 苛め ” と思うかもしれないが、俺には違う気がした。

「あ、そうだ。」

俺は鞆から紙を出す。一枚の紙だった。

普通にノートの切れ端だ。定規を使ったのか、切り口は綺麗だった。

「今日はここか」

この手紙は、待ち合わせの場所を書いたものだ。

（『アイツ』もよくするよ）

アイツとは幼馴染みのことだ。

俺は若干、急いで歩いていった。教科書・ノートを探すのに時間がかったために、下校時刻、ギリギリなのだ。

（『この紙』を見る限り、2－3 の教室か）

俺は通り過ぎるクラスの中の壁に掛けてある時計に目を向けた。

（やべえ、時間が！）

俺はあと少しで下校時刻になる時計を見て、慌てて走った。

2－3 の教室は三階にある。俺は今、一階だった。階段の角に差し掛かった。このまま、前にいって、右に階段がある。角になってるので、階段の様子は分らない。

（よし、この階段を三階まで一気に上れば2－3はもうすぐだ）

階段を上ろうと角で右を向いた瞬間。

ドット！と、俺は『誰か』にぶつかった。

「きゃ！」

「うわぁ！」

二人して後ろに倒れた。

「いててて、あ、すいません！」

「いたたあ、あ、はいー」

俺は立ち直しながら、『誰か』を見た。

その人は

「あ！一葉！」

二人とも立ち上がり終わった。

「あれ？良和君だ。お久しぶりだね」

ウチの学校の生徒会長だった。

名前は『干野一葉』（ほしのかずは）

俺の家のお隣に去年、引っ越してきた。

黒い長髪で、綺麗な顔立ち。背は俺よりも何センチが高い。

「久しぶり。今日も仕事か？」

この頃は一葉が生徒会の仕事が忙しくて、一葉とはあまり会うことがないのだ。

「うん。もうすぐ体育祭でしょ？その用意をね」

「ふうん、忙しいんだな」

「まあーね。あ、良和君は何してるの？」

その時、俺は元々の目的を思い出した。

「あ！そうだった！俺、2ー3に行かなきゃだった！」

「2ー3？・・・もしかして、幼馴染みさんと一緒に帰るの？」

「ああ、そうだぜ——って、一葉さん？」

へえー、そうなんだー、と何故か暗黒のオーラを出しながら、光を失った目で俺を見ていた。

何となく、怖かったので、早く行くことにした。

「じ、じゃあな！一葉！俺！急いでるから！」

なおも一葉の目は怖い。

「はあーい。幼馴染みさんによろしくねえー」

俺は慌てて駆け出した。

2ー3 に到着した。もう下校時刻は10分を過ぎていた。

「おーい。雅美、帰るぞ」

席についていた、俺の幼馴染みに声をかける。

「あ！遅いよ！カッズー！」

こちらに振り返り、陽気に声を返してくる。

「遅い、て。お前があんな面倒に待ち合わせるからだろ？」

シュタ、と立ち上がり、

「女の子はロマンチックが大好きなんだよ!!」

エッヘン気味に、胸を張る。

『八島雅美』（ヤシママミ）。俺の小さい頃からの幼馴染みだ。水色の短髪で同じ身長。顔立ちには可愛い方だろう。

一葉よりも、俺との友達付き合いが長い。

「はいはい。帰るぞ、雅美」

「はーいだよ! カッズー!」

いつもの雅美の陽気な声が聞こえた。

―秘密の秘密は困惑の証―

何はともあれ、雅美と二人で下校中である。

「考え事？ カッズー？」

「う？ あ、ああ。まあな」

クラスが違うため、あまり学校では話さないが大抵は登校・下校は一緒である。

「カッズー、考え事は頭に悪いよぉ」

「それを言うなら”体”に”だろ？」

「そうでしたぁー！ うっかり☆！」

「はいはい」

”体”でもおかしいけどな。

明るく陽気。それが俺の幼馴染みの特徴であり、長所だった。

その性格だからこそ、友達も多く、人望も厚かった。

（俺とは真逆だな）

根暗な俺とは違っていた。

妬ましくもあるが、誇らしい気持ちの方が大きい。俺にとっては雅美は妹みたいな存在だった。

（態度とか、話し方とか、な）

昔は雅美が俺に頼ってきたのに。今ではその真逆だ。俺が雅美に頼りつきりだ。

「で、カッズーは何をお悩みで？」

「世界の不思議について」

「ほ？」

あながち、間違っではないはずだ。

「まあ雅美の頭じゃあ、分からないよ」

「ぷうう！ カッズーのケチ助！」

子供みたい。これ、禁句。

「はいはい。悩み相談はまた――」

——今度で、と言うつもりだった。

だがそんなことよりも由々しき事態が起きた。

（あの子——だ）

さっきの夢（？）に出た、あの子だった。

赤い翼を背中から生やしていた。あの子だった。だが、見た目は同じなのに、翼はなかった。

それでも俺の脚は勝手に動いた。走ってすらいた。

「雅美、先に帰ってて！」

「え！で、でもさ！」

「いいから！先に帰ってて！」

「うう、早めに帰ってよ！」

そんなに遠くない距離なのに大声の俺ら。

走っていくと容易にその少女の元に着いた。

背後からなので、声をかける。

「あ、あの！」

「？」

少女がこちらを振り返る。

あの時の女の子の容姿だった。

栗色の短めの髪、小さい身長。可愛いらしい顔立ちに綺麗な瞳の女の子。

「君さ！さっきの——」

「『どちら様』ですか？」

どちら様、つまり俺とは面識がない。

——いや、待てよ。屋上であの距離。

しかも、異能現象まで合ったんだ。

顔が見かった可能性もある。

「ほら、さっき屋上にいた、俺だよ」

自分の顔に指を差して少女の反応を待つ。

「——屋上？」

「そ、そうだよ！」

探るような、疑るような、目を向けてくる。

「貴方は、屋上の『アレ』を覚えてると?」

アレ、とは異能現象が起きたときの屋上なのか? ならば、

「ああ、覚えてるぜ」

俺は答えた。

「——ッ! それは! 本当なの!?!」

大声で少女は答えた。

俺、どころか周りの奴らも驚いた。

「いや、どうしたの?」

制服から見るに中等部の子だろう。

ダンッ!、と俺の胸を叩く。

「だから! 貴方は『私が分かるの!?!』」

何を言ってるのが分からなかった。

その時、

「ね、ねえ?」

背後から肩を軽く叩かれる。

俺は声に反応して振り向いた。

「えっと、何?」

知らない人だったが、同じ高等部の人だった。

「君はさ、『一人で誰と話してるの?』」

はあ?、と思った。

目の前の女の子が分からないのか?、と。

「いや、俺の目の前に女の子がいるじゃん!」

「え? えと、僕には見えないな、ハハ」

苦笑気味に言われた。

だが、苦笑はどうでも良かった。

コイツには、いや、”俺以外には”この子は見えていない——の
か。

驚愕というより、信じられないというのが
心境だった。

「じゃあ、僕はちよつと、な」

なにも言わず固まっている、俺を見越してどこかへと行く誰かだった。

俺は俺の胸に寄りかかって泣きそうな女の子を見ていった。

「君は——まさか」

「はい、私は、」

——異色者です——

俺の耳に女の子の声が響いた。

—孤独な女の子の独り言。 2—

『私は分からない』 『猫さん、可愛い』 『今見てみた』 『気分が悪い』 『頭がいたい』 『目がかすれる』 『テレビ見る？』 『一人で見る？』 『一人は嫌だよ』 『嫌!』 『キツイ』 『苦しい』 『壊れる』 『崩れちゃう』 『大嫌い』 『犬は嫌い』 『女の子なの?』 『ヤダァ、』
『『』一人はイヤだあ!』』』

女の子の声が世界に反響した。

だが、結局は『こだま』しかせず、
誰にも聞かれなかった。

いや、一人には聞こえていたかもしれない
それが誰かは分からないが——

―現象の現れは、世界の現れ―

「5. ある女の子との約束事」

―『異色者』―

今、日本で起きてる『異色事件』の感染者の名前だ。

人によって症状が違い、持ってしまう『異能』も変わる。

「私は”人に覚えてもらえない”『異色者』なの」

今、俺と女の子は近くの公園にブランコに座って話している。

右のブランコが俺。左のブランコが女の子だという風に座っている。

女の子の名前は『遠松菜谷』（トオマツナヤ）。

中等部の二年の女の子だ。読書部に入ってるらしい。

「いつから、異色者に？」

「一ヶ月前から」

そんなに前だったとは。

「親に姿は見えるの？」

「見えないよ。貴方が初めてなの」

『俺が初めて』今までこの子はひとりぼっちで。

「どうやって生活してたの？」

「普通に。部屋には、親は寄ってこないの。食べ物は冷蔵庫から。

お風呂は深夜に」

”寄ってこない”のではなく『寄ってこれない』のだろう。

このケースは異能現象で言うと、

第一の現象「異状」にそっくりだった。

第一現象の場合、適用される自然現象は人の心である。

感染者の『一番強い思い』が異能となり、現象として現れる。

「君さ、――」

「え？」

「菜谷って・・・あの・・・その・・・呼んでください」

恥ずかしそうに、女の子は言った。

「え！いきなり呼び捨ては！——」

少し焦りながら俺は言った。

「お願い。この頃、呼ばれてない・・・から」

最後の方は弱々しかった。でも、そう思うのも当たり前なかもしれない。

一ヶ月、人に話されなかったら、そう思うだろう。

「分かった。な、菜谷」

「は、はい」

緊張感が伴った。何でだよ。

「二つ質問していい？」

「は、はい。分かりました」

菜谷に聞きたいことがあったのだ。

「まず一つ。何で俺が話しかけたとき、『とっさに驚いた表情』をしなかったの？」

まず一つ目だ。一ヶ月間も誰とも話されないなか、話しかけられたら、驚いた表情はつくるはずだ。

「それはですね。前にも何回かあったんです」

「何回か？」

「はい」

そのあと、菜谷はこう告げた。

”何回かは話しかけられたが、会話はあまり続かず、30分後には、話しかけてきた人でも菜谷のことを忘れてしまう。”

「何で『どちら様』って言ったの？」

「その言葉の始め方が一番会話が続くんです」

「成る程ね。二つ目の質問だけど」

「はい」

どちらと言うと、二つ目の質問の方が重要だった。

「異色者になる直前でもなくていい。異色者になる前は『どんなことを心』に思ってた？」

これが重要だ。第一の現象ならば、人の心は必要不可欠だ。その心によって現象が変わるのだから、その心の種類が分かれば現象の方向性も分かってくる。

「確か、『恐怖』ですかね」

「『恐怖』——か」

そうだとしたら、多分、人を怖がる気持ちの人が人を近寄らせない現象に変化したのだろう。

つまりは、『恐怖』が現象の正体なら菜谷の『恐怖』を消してあげればいいんだ。

そうすれば、必然的に異能も消える。

「分かった。俺が君の『現象』を無くしてあげるよ」

俺は言った。

「は、はい！ありがとうございます！・・・えっと・・・」

そう言えば、俺は名前を言ってなかった。

「俺の名前を良和だ。三崎良和」

「は、はい。よ、良和さん」

菜谷は安心そうにそう言った。

七色の笑顔と共に。

—あ、やべえ、時間やべえ—

取りあえず、家に帰ることにした。

公園の時計の針は6・00を指していた。

多分、雅美にぶち切られる。

（今日は雅美が昼食作ってくれるらしいな）

とにかく、遅れるのは『死』を招く。

「じゃ、俺は帰るよ。幼馴染みに帰るの遅くなったら、殺されるから」

目が死にそうになりながらも俺は立ち上がる。あ、この時間はもう殺されるな。時間を考えて思った。

「あ、はい！——あ、あの！」

菜谷が声で俺を引き止める。

「ん？どうした？」

俺は振り返る。幼馴染みが、怖いのにいい。

「あの、メールアドレスの、こ、交換しませんか？」

「メールアドレス交換？」

「はい。そ、その方が連絡取りやすいですし、い、良いですか？」

「ああ、別に良いよ」

俺は菜谷とメールアドレスの交換をする。

ピピッ、と音がして、終わった。

「よし。ではこれで——」

「あ、あの！」

またもや、呼び止められる。早くしなきゃ行けねえのに。

「はい。何でしょう？」

何か、泣けてきましたよ？菜谷さん。

「よ、よろしく願いします！」

ペコリ、と頭を下げた。可愛いらしかった。

「あ、うん。こっちこそ、よろしくな！」

俺もペコリ、と頭を下げた。いや、俺の場合は『ペコリ』ではなくて『”べ”こり』だな。
何か、きたねえ。

「じゃ、また明日」

俺は右手を上げる。

「あ、ハイです！」

菜谷も右手を上げた。

子供みたいに元気だった。

「オッス、また、明日な！」

そういつて俺は後ろに体の向きを変えて、なるべく急ぐために、走って家に帰るのだった。

家に帰ると、呪詛が聞こえてきた。

「アイ——ッ——

オソ——

スギ——

ダ——

——ロオ——

（何か、怖い！）

暗黒のオーラと漆黒の呪詛がリビングから聞こえてくる。

（あれ、何か、寒気がするぞ、あれ？）

怯えながらもリビングに歩いていく。

リビングの前に来たので、リビングにいる（と思われる）

「呪術師

」様に声をかける。

「お、オッス、雅美？」

ギョロ、という音を出しながら、此方を振り向く。目の光彩がなかった。

その目に、あるのは——。

「アァー、オカエリー」

——とてつもない、闇だった。

「えっと・・・ですね、雅美様」

「ナニ？ カッズー？」

（さてと、どうしよう？）

俺の悪あがきが始まった。

（俺、殺されるかもな）

涼しく俺は考えた。

目の前の、呪術師は簡単には、俺を許してはくれないようだった。

—孤独な少女の囁き—

「やっと見つけた、私が分かる人を」
ある少女は、一人、公園で呟く。

その表情には、『嬉しさ』と『寂しさ』があった。

「でも、一人はおしまい何だね。終わりは悲しいね」
それでも、少女の表情には、嬉しさがある。

「もう、一人はおしまい」

次第と、嬉しさが表情に増えていく。

「良かった…」

安心感が少女を包んだ。

「良かったあ！」

叫んだ。公園で一人、少女の声は反響する。孤独な公園で。

「私は、。。。」

一人、公園で呟く少女には、嬉しさと寂しさがあった。

そして、次第に『破壊感』も表情には出ていた。

無意識に、無我に、無感情に。

そして、その少女は『遠松菜谷』の姿に似ていた。

—その後の報酬と応酬—

何とか、雅美に許してもらった。

「特別だよ？普通はこんな時間に帰ったら、『メエ！』ですよ」
今、お前に「メエ！」されたばっかですけどね。

俺は、苦笑する。

「はい。肝に命じとくよ」

次にこんなヘマしたとしても、次のチャンスはないだろう。

「はい、それでいいのだよ！」

いつもの雅美がいた。呪術師ではなかったようだ。

「安心しろ、次はしないから」

次にチャンスがないからな。

「なら安っ心だね！」

「おう。で、今日は、ご飯は雅美の番だろ？どんなが出来た？」

「ああ！それはね！」

と、誇らし気に雅美はそう言う。

やっぱり、『普通』って良いな、と俺は思うのだった。

「6. 何かのラブコメ」

ご飯も食って、腹一杯になった。

「ふうー。あ、雅美は自分ん家に帰るのか？」

「うーん。いや、今日は泊まってくね♪」

「分かった。布団はどこに？」

と、俺が言うのと雅美は驚いた顔を見せた。

「え！？泊まってるの！？」

「いや、別に嫌ならいいが」

「いやいや！泊まる！泊まるからね！」

「お、おお」

どうしたのか、雅美はテンションが高くなった。

「で、どこで寝るんだ？」

「はいはい！良和の隣がいい！」

「はいはい。分かったよ。」

「やったあー！」

テンションが高いな。どうしたのだよ、雅美さんよ。

「じゃあ、布団、運ぶぞ」

「分かりましたあー！」

「ウース」

俺は布団を運んだ。

まあまあ、重さがあった。

俺の自室に布団を運ぶ。自室は俺の家の二階にある。階段、上るの面倒臭い。

雅美は俺の後ろでウキウキしてる。

俺のベットの横に置く。

まあ、布団とベットには高低があるから、ベットからは布団は低く見えるがな。

「では、運び終わりました、隊長」

「ご苦労です！二等兵さん！」

二人で兵隊の真似事をする。敬礼とかしてるしな。

「で、雅美は布団とベット。どっちがいい？」

はいっ！、と雅美は手を元氣良く上げる。

「私はベットが良いです！」

「俺もベットがいい」

「ならば、ジャンケンですな！」

「そうですな」

ジャンケンポンっ！、と俺たちはジャンケンする。俺が『グー』で、

雅美は『パー』

「やったあー！勝ったよ！」

「ちえー」

舌打ちに似た何かを俺はする。

もう俺の頭のなかに『屋上のこと』はなかった。ただ、日常しか頭になかった。

「さてと、風呂に入るか」

「っ!!」

何か雅美が驚愕と覚悟の顔になる。

「どうした？」

「分かったよ。風呂だね、お風呂、お風呂、お風呂、ブツブツ、と言う雅美だった。

「先に入っとくぞ」

俺はそう言った。

―ある幼馴染みとのラブコメディ―

俺は風呂に入っていた。

当たり前だ。さっき、「風呂に入るか」と言ったのに、何で入らない何てことがあるのだろう。

「ふうー」

俺は、今日あったことを頭のなかで整理する。

「確か、『屋上のこと』と菜谷のことだっけな」

バシャ、と音がする。肩まで俺は湯船に浸かっている。その状態で腕を動かしたためにでた音だった。

「異能現象――か」

俺は『現象』を強く拒む。だって『アレ』が無ければ兄さんは――

――はぁ、と俺は嘆息して、

「考えてもしゃーない。『兄さん』のことは、もう――」

しんみりした雰囲気風呂のなかを支配した、その時。

「カッズー、湯加減はどう？」

風呂場から声が聞こえてきた。雅美の声だ。

「あぁ、普通かな。大丈夫だぞ」

「そうかね。だ、大丈夫かな！」

何か、動揺しながら大きな声で返事をしてくる。

「うん。まぁな」

俺は適当に言った。

「良し」

雅美は覚悟を決めたような声を出す。

ガラガラ、と『風呂のドア』が開いた。

そこから、白いバスタオル姿の雅美が出てくる。『こちらに入ってきたのだ』

「ううううええ!？」

何か変な声がでたな俺。雅美が入ってきた。
バスタオルを体に巻いている。

「何をしてるんだよ!? 雅美さんは!？」

俺、絶叫するぜー。

「え! え! だっ、だってえ」

「だってじゃねえ! 馬鹿!」

俺は雅美に風呂にある数多の物体をぶん投げる。

(あれ? 普通は女の子が男に投げるんじゃない?)

何かしらの考えが頭のなかに出る。だが無視した。洗面器が雅美の額に命中する。

スッコンッ!、という音が聞こえた。

「ううううえ! 酷いよ、カッズー!」

額を押されながら、雅美が呻いた。

「う、うるひゃい! 出てけ!」

またもや、変な声がでたな俺。

「うううううう! カッズーの馬鹿!」

捨て台詞と共に、雅美は逃げていく。

ドタドタ、と音を立てながら走って逃げる雅美だった。

あ、そういえば、バスタオル姿のまんまだぞ、雅美。

「はあ、はあ、はあ。危機は去った」

荒い呼吸をする。ああ、ビックリした。

「ふうー」

幸い俺は起立はしなかった。危なかったな。

起立をしたら、アレだ、『死』だった。

「……もう上がろう」

俺は風呂を後にした。

風呂から上がると、俺の自室で雅美がふて腐れていた。つまり、拗ねていた。

「ばーかカッズー」

「お、お前な」

俺は苦笑する。雅美はベットにくるまっていた。顔はこちらを向いている。

「昔は一緒に入ってたじゃん。ばーか」

「いつの話だよ!？」

「・・・・・・昨日とか」

「なわけねえだろ!! 何十年前だよ!」

つい最近みたい言いやがった、雅美だった。嘘を吐くな、雅美。

「ブー、でもお風呂くらい良いじゃん!」

頬を膨らませて、ブウブウと文句を言う雅美。実際、可愛いかった。

「ならばお前は他人に裸を見せていいと?」

「カッズーは幼馴染だもん!」

「だからってな。恋人じゃあねえんだし」

「恋人っ!!」

驚愕の表情を作る雅美。

「な、なら、恋人ならいいと!？」

「例えだつつの! もうさっきのは気にしないから、拗ねるな。電気消すぞ?」

就寝することを告げる。

「はぁーい、ばーかカッズー」

「はいはい」

適当に言い、電灯の電気を消す。部屋は真っ暗になった。俺は布団のなかにもぐり込む。

静寂が俺たちを包んだ。窓から出る月の光が明るかった。

そこで、俺が言葉を切り出した。

「なあ、雅美、」

―雅美の中のシンデレラ―

俺は話を始めた。

俺たちは二人とも、天井を見る形で寝ている。

「なあ、雅美」

「何？馬鹿カッズー？」

「馬鹿って言うなよ」

「うるさい、馬鹿カッズー」

俺はまだ許されてないようだった。

嘆息気味に俺は話を続ける。

「雅美はさ、怖いときって、どうやって恐怖を無くす？」

「それって、相談事？」

雅美がこちらを向いた。布団とベットには高低差があるので、俺は雅美に見下ろされている形になる。

「うーん？言ってしまうばそうかな」

「分かった。答えるね」

相談事になると、いつも雅美は真剣に聞いてくれた。今だってそう
だ。

「私の場合は、『好きなことをして』パァ！と忘れる――かな」

「好きなこと？」

「うん」

少しの笑顔で、雅美は俺に言った。

月の光に照らされて、綺麗だった。

俺は恥ずかしくなって、雅美と反対の方向を見て、そっぽを向いた。
俺は少し顔が赤かった。そのまま俺は話した。

「好きなことって？例えば？」

「うーん。難しいね」

そっぽを向いているので表情は分からなかったが、その声音は『難しい
ない』ことを意味していた。

「私なら、友達と話したり、遊んだりかなあ」
いつものほんわか声で雅美は言った。

俺は無言だった。静寂の一部になった気分だった。

「あとは、私の場合は――」

そのとき、雅美の声が途切れた。

いつものほんわか声で気づかなかった。

今の時刻は『12・00』なのだ。いつもの雅美が

『シンデレラ』に襲われる時間帯だった。

「しまっ――」

――た、と言おうとした。がそれは叶わなかった。なぜなら、俺の首が絞められていたからだ。

理由は明白。

『雅美が俺の首を絞めていた』からだ。

雅美は俺の上に馬乗りで乗り、俺の首をその細い両手で思い切り絞めていた。

「グパッ――ケなア――」

もうアイツが雅美の『表』に出ていた。

俺は奇声を言う雅美の体を馬乗り状態から蹴った。足を振り上げて、雅美の後頭部に直撃した。バコンッ！、と言う鈍い音がした。

「――グパッケなア――――ごはっ！」

雅美の手の絞めが弱くなる。そのまま俺は

チャンスとばかりに、右腕で雅美の左頬を殴った。これまた、バコンッ！、と言う鈍い音がした。

「――ボハッ！――」

馬乗り状態の雅美が俺から見て、左に突き飛ばされる。

「――アア――――あ――」

左の壁にぶつかった。ずりずりと、壁に寄りかかったまま、床に落ちる。

「――アア、――――イアア――――」

光彩のない虚ろな目がこちらを見る。

そして、

「——ッ——グ？」

自分の首を絞め始めた。弱々しいその細い雅美の両手が雅美の首を絞める。

「雅美ッ！」

俺は咄嗟にはねあがり、雅美が自分の首を絞めている両手を強引に離させる。

「しっかりしろ！雅美！」

俺は両手を無理矢理、首から離させ、

俺は雅美を抱き締める。雅美の顎を、俺の右肩に寄せ、俺の両手は雅美の背中に回り、雅美の後頭部を背中から撫でる。

「——カッ——ズー？」

涙を雅美は流した。俺の背中に雅美の涙が落ちる。

「ああ！俺だ！良和だ！」

「まだ居てくれる？」

話が噛み合っていない、『このときは』
いつもそうだった。

「いつだって居てやるさ！そばに！」

「——嬉しい」

そのとき、雅美の意識は途切れた。

グタァーと、全身から雅美は力を抜いてしまう。気絶したのだ。

「はぁ、——雅美」

俺の声だけが、部屋で聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922ba/>

『異能現象』

2012年1月11日02時48分発行